

日本正教会訳聖書における「神」の漢語としての奥行き —— 中井木菟麻呂の信仰と思想を手がかりに ——

長澤 志穂

凡例

- ・引用にあたっては出典を〈 〉内に示す。
- ・引用文中の〔 〕内は筆者による補足、訳である。

はじめに

明治期の日本正教会においてニコライ（1836-1912）の聖書翻訳事業を補佐した人物として知られるパウエル中井木菟麻呂（または木菟麿、号は天生、1855-1943）¹は、大阪懷徳堂²学主を歴任した中井家の末裔であり³、少年期に儒教を中心とする漢学⁴の素養を身につけていた。23才のときに正教会の洗礼を受け敬虔な教徒となった中井であるが、一方で、生涯、儒教に対する肯定的評価は揺るがなかった。

従来、日本正教会訳がギリシャ語や教会スラヴ語に忠実な和訳を作るために漢語を工夫して用いたことは指摘されてきた⁵。ただし、正教会訳中の漢語がもたらす、漢籍⁶を典拠とする意味の奥行きについて、必ずしも掘り下げて研究されてきたわけではない⁷。筆者は中国思想を専門に研究しており、その立場から、本稿においては、日本正教会訳聖書中の「神」という訳語に中井の信仰、儒教観および漢学の知識が反映されている可能性について、初歩

¹ ニコライと中井が共同で祈祷書の翻訳を始めたのは1882年。新約聖書の翻訳は1895年に始まり1901年に出版となった。中井はニコライの没後も祈祷書の翻訳事業を継続した。なお、ニコライは1869年からすでに聖書翻訳に着手していた。中井の事跡については牛丸、正教会の聖書翻訳史については海老澤、黒川、ダヴィド水口等を参照。

² 懷徳堂は大阪の豪商を中心とする町人たちの共同出資によって1724年に作られ、1726年に徳川幕府公認となった半官半民の学問所であった。懷徳堂の歴史については湯浅・武田健二を参照。

³ 木菟麻呂の高祖父の贅庵、曾祖父の竹山、祖父の碩果はそれぞれ懷徳堂第2代、第4代、第5代の学主であった。また、竹山の弟は履軒である。

⁴ ここでいう「漢学」とは、西洋の学問手法を取り入れた中国学とは異なり、漢籍を主に用いて中国の思想・文化について学ぶ日本の伝統的学問を指す。

⁵ ゴヴォルノヴァ、ダヴィド水口、ドミートリエフ、ポタポフ等を参照。

⁶ 「漢籍」について、ここでは辛亥革命（1911）より前に漢文で書かれた書籍を指すものとし、著者の国籍は問わないこととする。漢籍の様々な定義については京大人文研附属東アジア人文情報学研究センター編を参照。

⁷ 正教会訳のいくつかの漢語については拙論（2014）にて若干の考察を試みた。

的な考察を試みる。中井の思想や信仰について考察するために、ここでは大阪大学所蔵『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』（以下『草稿類』と略す）⁸や、正教会の出版物に掲載された中井の文章など、中井自身の著述を中心に用いる。そして、中井が把握していたであろう漢籍における「神」の多面的意味を確認し、中井の思想や信仰と照合しつつ、「神」の漢語としての奥行きが正教会訳聖書中の訳語「神」に生かされている可能性を指摘したい。

1. 日本正教会訳の基本方針

まず、日本正教会の聖書翻訳の基本方針を確認しておく。ニコライと中井は、既存の和訳や漢訳を参考にしつつも、ギリシャ語や教会スラヴ語に忠実な訳を目標としていた。正教会訳は原則として、一つのスラヴ語の語根に一つの漢字を当てることとしており、文脈によって漢字を変えることはない⁹。また、日本語にない概念については新しく造語し、漢字の組み合わせによって意味が明確に把握できるようにしている¹⁰。

正教会訳には、日常語としては使われることの少ない、漢籍に典拠をもつと思われる熟語が散見され¹¹、明治期においても現代においても平均的な日本人にとっては比較的難解と思われるが、ニコライは次のように述べていた。

わたしは、福音書や奉神礼用諸書の翻訳が大衆の教育程度まで降りてゆくべきではなく、逆に、信者たちが福音書や聖体礼儀用諸書のテキストを理解できるところまで昇ってゆくべきだと考えているのです。福音書に卑俗な言葉を用いるのは認め難いことです。¹²

つまり正教会訳は当初から日本の知識人の理解力を標準として訳語を選択していたことになる。主要な読者はニコライや中井同様に漢籍の語彙を通して聖書を理解できる者であるか、もしくは理解すべきと想定されていたのである。そうであるならば、正教会訳の語彙の背後には漢籍へと通ずる意味の奥行きが広がっていると考えなければならないであろう。

2. 中井におけるキリスト教と儒教の関係

中井の正教会への入信の経緯については、中井自身が正教会の機関誌上で語っている。

⁸ 『草稿類』に含まれる「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麻呂拝覆ス」「中井木菟麻呂再」「儒仏耶三教比較結論」の三書については佐野が翻刻と解説を行っており、本稿ではこれらを参照して引用文に句読点を施した。

⁹ 例えば、Благословение は「祝福」、Благослови は「福をください」、Блаженный は「福者」、Блаженни は「福いなり」である。ドミトリエフ 9 頁。

¹⁰ 例えば、神のひとり子は「独生子」、聖母マリアは「生神女」と表記される。

¹¹ 拙稿（2014）では「太初」「元始」「覆育」等を取り上げた。

¹² ポズニエーフ 62-63 頁。

余は儒門に生れたる者として、孔教尊崇の念は、終始変ることはないが、唯人生問題の全斑を解釈する為に不十分ではあるまいかと、聊疑点を懐いてゐた処に、偶天啓の正教を聞くことゝなつて、翻然として開悟するに至つたのである。さうして見れば、自分等は、孔顔思孟の未知るを得ざりし所に遭遇した者であつて、之を奉ずるは、寧ろ孔教に違背するのではなくて、反つて其本旨を得たる者であると信じてゐる。
〈『ぱんだね』 2-3〉

中井は儒教への変わらない尊崇の念をもちつつも、儒教では人生問題のすべてを解釈するには不十分と感じ、正教会に入信したのである。中井はキリスト教が儒教に背くものではなく、むしろ儒教の「本旨を得た」ものであると述べているが、中井にとって儒教とキリスト教はどのような関係にあるのだろうか。

天トハ意思智能ヲ具有シ、天地統制ノ最大権力ヲ保持シテ、下土ヲ照臨スル者、即活潑潑ノ神靈ニシテ、理トハ神靈ノ意旨ニ適合スル所ノ道ナリ。〈『草稿類』「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麻呂拝覆ス」(以下「拝覆」と略す)¹³⁾

唯其「天」、或ハ「皇天上帝」ノ語義ハ、後儒ガ之ヲ理ナリト解キタルハ、遂ニ古聖賢ガ天ニ対シテ識得セシ所ヲ誤リテ、永ク其真相ヲ掩没セリ。…要スルニ、天ハ則天、理ハ則理ニシテ、混淆シテト為スコカラズ。〈「拝覆」〉

今尊書ニ謂フ所ノ宇宙ノ玄理万有ヲ創造セシ靈妙不可測ナル神理ト云ヘルモ、皆斯ノ解説ヨリ来リタル者ニシテ、基督教ノ教フル所ノ神造物主ト全然解釈ヲ異ニセリ。然レドモ本来儒教ノ所謂天或ハ皇天上帝ハ、決シテ基督教ノ教フル所ト矛盾スル者ニアラズシテ、直ニ之ト相合フベキ者ナリ。蓋儀ノ経ヲ解クハ決シテ前説ヲ襲踏セズシテ、直ニ古聖賢ガ天ニ対スル觀念ト接触ス。想フニ古聖賢ガ天ニ対スル觀念ハ、此ヲ以テ意思智能ヲ具有シ、天地宰制ノ権力ヲ保持スル者ト為シテ、或程度マデハ神造物主ヲ推測スルヲ得タリシナリ。〈「拝覆」〉

中井によれば、本来、孔子など古聖賢の儒教における「天」あるいは「皇天上帝」¹⁴⁾は意思・人格をもった宇宙の至高の主宰者であり、基督教の神と矛盾しない。後世の儒家たちは「天(上帝)」を意思・人格を持たない宇宙法則「理」と解するが、それは誤った儒教

¹³⁾「拝覆」は、ニコライの講演を聴いた久保田啓十郎という人物からの質問状に対する中井の返信の草稿であり、1907年5月13日の日付が記されている。「拝覆」の内容からみて、久保田は儒教を信奉する立場からキリスト教を批判したと考えられる。佐野による解説を参照。

¹⁴⁾『草稿類』において中井はしばしば「皇天上帝」の語を用いるが、儒教経書中によくみられる「昊天」ないし「昊天上帝」とほぼ同義と考えられる。すなわち「皇天」も「昊天」も「上帝」とほぼ同義である。

理解であるという。中井にとっての理とは、「天」の意思にかなう人間の行動規範を指すものであった。

ただし、儒教がキリスト教に比べ不十分である点について中井は次のようにいう。

此等ノ諸聖賢ハ、智明ニ識高シト雖、如何セン有限ノ人智ヲ以テ無限ノ神明ヲ推測スルガ故ニ、譬ヘバ、遠山ヲ雲烟模糊ノ際ニ望ムガ如ク漠然トシテ景仰スルニ過ギズ。其命ト云フモ、亦榮枯盛衰禍福得喪ノ迹ニ鑑ミテ、天意ノ行ハルル所ヲ揣量スルノミ。天人密接ノ関係ニ至リテハ皇天上帝ノ活言ヲ以テ明示セラルルニアラズンバ、之ヲ説明スル権能ヲ有セザル者トス。故ニ^僕ハ古聖王孔子子思等諸聖賢ノ天ニ対スル觀念ヲ以テ他ノ儒流ノ見ル所ヨリモ一層神造物主ニ接近シタル者ト為スト雖、其道ヲ行フ大任ニ至リテハ、ニコライ大主教ノ説キタル如ク人ヲ神造物主ニ就カシムルニ至ルマデ指導ノ職ヲ尽シタル師傅ナリト見ルナリ。其未達セザル所ヲ補フルニ、完全無欠ノ真教ヲ以テスルハ、実ニ是レ儒教ノ本旨ニシテ、古聖賢ガ向上ノ觀念ニ逆ハザルナリ。
 〈「拝覆」〉

儒教の古聖賢の天理解は有限の人知をもって推量したものにはすぎず、真に天人関係を理解するには「天」みずからの言葉による教示が必要である。したがって儒教は究極的にはキリスト教によって補われるべきであり、それは古聖賢の意向にも反しない。これが中井における儒教の位置づけであった¹⁵。

3. 中井の「天／上帝」のとらえ方

中井は儒教の「天（上帝）」とキリスト教の神を同一視したが、ではなぜ正教会訳は神の訳語として「天」や「上帝」ではなく「神」を用いるのだろうか。ニコライと中井はブリッジマンとカルバートソンによる漢訳やプロテスタント和訳を参照しているが、それらが「神」を用いているのを単純に踏襲したためとは言い切れない。そのことを中井の問題意識に注目して論じておきたい。

鬼神死生ノ事ヲ知ルト云フニモ、唯知ルトバカリニテハ語意漠然トシテ、当否ヲ断定スベカラズ。此ノ知ルト云フコトハ程度問題ニシテ、自カラ二条ノ意義アルコトヲ承知センコトヲ要ス。天地間ニ有形ナル万象ノ外ニ、一ノ無形有能ナル神靈アルコトヲ

¹⁵『草稿類』「儒仏耶三教比較結論」にも同様の主旨が述べられている。中井における儒教とキリスト教の関係については佐野の論文を参照。後世の儒学の理気論（宋学）を批判し古聖賢の天（上帝）崇拝はキリスト教と矛盾しないとする論法は、明末のマテオ・リッチや徐光啓らにすでにみられ、儒教徒にキリスト教を受容させる際の常套手段であったといえる。ただし、徐光啓や楊廷筠ら中国人キリスト者が儒教とキリスト教は一致すると主張したのに対し、リッチは古代儒教が天（物理的空間としての天）と上帝（唯一至高の神）を混同しているとし、儒教をキリスト教より劣った存在とみなしていた。桐藤 61 頁を参照。中井もまた儒教を不完全なものとみなすが、その論拠はリッチと異なり、儒教には天啓による神の言葉がないことにあった。

知ルハ、人性自然ノ要求ニシテ、何人モ少シク心ヲ物象以外ニ注グ時ハ必斯ノ一事ニ想到セザルヲ得ズ。…是レ第一ノ意義ニシテ天然法ヲ以テ了解スベキモノナリ。死生ノ事モ亦然リ。人類ニ死アリ、又生アル理ヲ知得スルハ、同ジク第一ノ意義ニ属ス。単ニ天上ニ有能者アルコトヲ知ルト云フノミナラズシテ、其性情如何、其天地万有ニ於ケル関係如何、其人類ニ於ケル関係如何ヲ知リテ、神旨ニ適フ事ト適ハザル事トヲ判定シ、人ハ之ニ対シテ如何ナル本分ヲ尽スベキカヲ精細ニ知悉スルハ、人智ノ及バザル所ニシテ、之ヲ知悉セントニハ、天ヨリノ啓示ヲ蒙ランコトヲ要ス。是レ第二ノ意義ニシテ、天然而上ノ方法ヲ以テ了解スベキ者ナリ。死生ノ事モ亦然リ。唯生アレバ必死アル事ヲ知ルノミナラズシテ、人ハ如何ニシテ生レ如何ニシテ死スルカ、何ニ由リテ人間ニ死アルカ、人間死後ノ運命ハ如何ナルカ等ヲ知得スルハ、人智以上ノ事ニ属ス。均シク是レ第二ノ意義ナリ。

僕モ亦、…敢テ孔子ヲ以テ天ノ有能者ヲ識認セザリシ者ナリトハ言ハズ。然レドモ、之ヲ識認セシハ、所謂第一義ノ知得ノミ。第二義ノ知得ニ至リテハ、人智以上ニ属スルガ故ニ、孔子ノ大聖ヲ以テス雖、亦知ルコト能ハザルハ明白ナルコトナリ。〈『草稿類』「中井木菟麿再」(以下「再」と略す) 16〉

中井によれば、儒教の古聖賢が超越者「天」の存在を認識したことは確かである。しかし、超越者に関する認識には以下の二種があるという。

- ①有形の自然現象の観察から、唯一にして無形有能の超越者がいることを直感的に知る。
- ②この超越者とはいかなる存在か、超越者と人間はいかなる関係にあるのか、超越者の意思にかなうために人間はいかに生きるべきか、人間はどのようにして生まれ死んでゆくのか、なぜ人間は死ぬのか、死後はどうなるのかなど、人智の及ばないことについて、天啓によって知る。

儒教の古聖賢は①の素朴な「天」認識にとどまっている。それに対し、②に挙げられる問いこそは中井が儒教では答えを得られないと感じていた「人生問題」であったと考えられる。

儒教ニ於テモ、人類ノ遵守スベキ道ハ経籍ニ於テ教示セラレタレドモ、是人倫彝則ノ外ニ出デズ。神ニ事フル道ハ、斯ノ裏ニ求ムベカラズ。無論天ニ事ヘ鬼神ニ奉事スルコトハ教ヘラレタレドモ、是レ単ニ敬ミテ天ヲ恭フバカリニテ、如何ニスベキガ天意ナルカ、如何ニセバ天ノ旨ヲ行フヲ得ベキカニ至リテハ、漠然トシテ捕捉スベカラズ。是レ神ノ直示ナクシテ奥義ノ存スル所、知ルベカラザレバナリ。〈「再」〉

固ヨリ孔子ハ天ノ事ヲ言ハレタレドモ、天ニ神造物主アリテ、人間ニ如何ノ関係ヲ及ボスコト、人間ハ神造物主ニ対シテ如何ナル道ヲ尽スベキカ等ノ事ヲ教ヘラレシコト

16 「拝覆」への久保田の再質問に対し、中井が再び返信したものの草稿。1907年7月25日の日付が記されている。佐野による解説を参照。

ナシ。神ト人トノ関係ハ、父子ノ情ヲ以テ結合セラレ、其慈憫愛憐、皆此ニ依リテ発現ス。儒教ノ天ニ対スル觀念ハ、専ラ「敬」ノ一字ニアリテ、「天」「旻_[ママ]天」等ノ語ニハ、微ニ其意ヲ含メリト雖、常ニ愛慕ノ情緒ヲ閑却ス。是等ヲ説明シテ、神造物主ヲ人心ニ銘刻セザレバ、安ゾ能ク神ヲ教フト云ハン。〈「再」〉

上記二文は聖書の内容が荒唐無稽であるとする儒教を信奉する立場からの批判に対する反論である。中井によれば、儒教の「天」に対する態度は「敬」、すなわちかしこまって敬うことに集約されるが、そこには天に対する「愛慕ノ情緒」がみられない。神について教えるならば、神を「敬」することだけでなく、神は何を望んでいるのか、人間はどう行為すれば神の意思にかなうのかといったことを天啓によって教えなければならないという。中井のいう「天啓」とは聖書に記された奇蹟や預言にほかならない¹⁷。上の引用文において、中井は儒教的「敬」の対象として「天」「昊天」¹⁸の語を用い、キリスト教的愛慕の対象としては「神」を用いている。そして、「天」や「昊天」は人間に「愛慕ノ情緒ヲ閑却」せしめる語であるとみなすのである。

確かに、以下に引くように、儒教における人智を越えた存在への尊崇には、不可解なため距離をおくという態度がしばしばともなう。

敬鬼神而遠之、可謂知矣。〔鬼神については、大切にしながらも遠ざかっている、それが知といえよう。〕〈『論語』雍也〉

子不語怪力乱神。〔孔子は怪異と暴力と背徳と神秘については語らなかった。〕〈『論語』述而〉

季路問事鬼神。子曰、未能事人、焉能事鬼。〔季路が鬼神に仕える方法について質問した。孔子は、いまだ人に仕えることもできないのにどうして鬼神に仕えられようかと言った。¹⁹〕〈『論語』先進〉

一方で、中井は、人間が神の意思を知り、それにかなう行為をすることを重視している。そのため、儒教の「天（上帝）」に対する「敬」には愛を介した神と人との呼応という側面が弱く、十全な天人関係とはいえないとする。儒教の「天（上帝）」はまさしく宇宙の主宰

¹⁷ 中井は『草稿類』「儒仏耶三教比較結論」において「不動不変の証徴として上天より開示せられたる者は奇蹟と預言とである」と述べている。

¹⁸ 中井は「再」において「旻天」と筆記しているが、「昊天」または「皇天」のことと思われる。本稿注14参照。

¹⁹ 以上三つの『論語』からの引用については金谷118-119、139、208-209頁を参照。

者でありキリスト教の神に等しいが、それへの儒教的「敬」はキリスト教の信仰に劣るとしているのである²⁰。

天啓の存在を自明視する中井の論法は儒教徒側からすればドグマの押しつけでしかなくあろうが、儒教によって満たされなかった超自然（「天然而上」）に関する生の問題の解決を正教に見出した中井にとっては、キリスト教における愛を媒介とした神人の呼応は決定的に重要なものであったといえる。

すなわち中井にとって、「天（上帝）」という訳語は、自然現象を通じて素朴に感じとられる超越的存在への、一方的で距離をおいた儒教的「敬」を想起させるにとどまるものであった。「敬」は中井の信仰とは異なるものであり、儒教的「敬」を強く想起させる「天（上帝）」は、中井にとって神の訳語として不適當であった可能性があるのではないだろうか²¹。

4. 漢語「神」の奥行き

「神」という訳語について、日本において問題となったのは多くの場合、日本語の多神教的な「カミ」とキリスト教の神との意味のずれであった²²。

しかし中井の場合、キリスト教の神と日本の「カミ」の混同をあまり問題視していないようである。漢学に造詣が深かった中井は、訳語「神」を日本語「カミ」としてよりも、漢語「神^{shen}」としてとらえていた可能性がある。正教会訳独特の造語の一つに、spirit にあたる「神^{しん}」がある。「神」一文字で「しん」と読ませるこのような用法は一般に日本人にはなじみが薄いと思われるが、あえて God と spirit に共通の漢字「神」が当てられ、読みと記号をもって「神^{かみ}」「神^{しん}」と訳し分けられているのである。ニコライと中井が「神」「神^{しん}」を訳語として採用したとき、漢籍において「神」という語がもつ意味の奥行きが意識されたであろうと考えられる。以下、そのことについて論ずる。

資料 1 は中井の『草稿類』に 1 枚の紙片として含まれていた手書きの表²³を筆者が翻刻したものである。ここから、中井が spirit、heart、soul などの語彙の訳し分けに配慮していたことがわかる。資料 2 は資料 1 に示された聖書の該当箇所を抽出したものである。これを見るに、他派の翻訳では spirit に対して「心」「靈」「神」「性情」などが、soul に対して「性」「心」「精神」などが文脈に応じて使い分けられている。それに対し、正教会訳

²⁰ 日本で儒教知識をもつ人々がキリスト教を初めて受容した際、キリスト教の神への信仰を「天（上帝）」に対する儒教的な孝（父子関係）や忠（君臣関係）になぞらえて理解しようとする例が多くみられた。金論文参照。一方、中井の場合はそれらと異なり、キリスト教の神人関係を父子関係になぞらえてはいるが、愛を介した関係に力点を置いており、孝として説いているわけではない。

²¹ 中井の文章にしばしばみられる「昊天」「造物主」などが他の選択肢とならなかったのかという疑問もあるが、神にあたる教会スラヴ語「Богъ」（木村 187 頁）を漢字一字に置き換えるという正教会訳の原則が考慮されたと考えられる。

²² 鈴木 202・204 頁を参照。

²³ 書かれた年代や目的は不明だが、中井が訳語の使い分けを吟味していたことを示す資料として取り上げる。

では spirit は「^{しん}神」、the Holy Spirit は「^{せいしん}聖神」、soul は「^{たましい}霊」、heart は「心」と訳され、文脈によらず原則として不変であることがわかる。

そこで次に、漢籍における「神」という語の主な用例と意味を整理し、中井の God や spirit の理解と比較して、その共通点と差異を探りたい。

① 礼拝の対象となる神聖な存在

まず、儒教経書において最も頻繁にみられる「神」の用例としては、やはり礼拝の対象となる神聖な存在、超越者を指すものが挙げられる。

山林川谷丘陵、能出雲為風雨見怪物皆曰神。有天下者祭百神。〔山林や川谷や丘陵において雲を起こし風雨を起こして、種々の怪しい物事を出現させる力のあるものを、すべて神という。天下を治める者はこれら数多くの神を祭らねばならない。24〕 〈『礼記』祭法〉

中井もまた、「天ニ事^{つか}へ鬼神ニ奉事スル」という表現を用いており（本稿 41 頁の引用文）、礼拝対象としての「神」について承知している。ただし中井は、儒教の本来の礼拝対象は唯一至高の存在であったとする。そこでは、上の『礼記』の文にみられるような多神教的「神」という要素は捨象されているといえる。

② 万物にあらわれる超越的存在のはたらき

以下の文では、中井は主に『周易』における「神」の用例を列挙し、①の礼拝対象としての天神や鬼神とは異なり、森羅万象に観察される運動変化の、人智の及ばぬ神秘性を指す例として説明している。

観象伝曰、観天之神道、而四時不忒。聖人以神道設教、而天下服矣。〔彖伝〕
斯ノ神道トハ、即至神又ハ神妙不測ノ道ト云フコトニテ、神ハ鬼神ノ神ニアラズシテ、形容詞ナリ。…鬼神ノ情状ヲ知ルト云フモ、精氣ノ聚マリテ形ヲ成シ、游魂ノ散ジテ変ズルヲ為スコト即生ヨリ変ジテ死ト為ルコトニ由リテ、鬼神ノ屈伸往来ノ動静ヲ推測スト云フノミ。…幽明死生鬼神ヲ知ルト云フモ、皆此レ他物ノ形迹動静ヲ観察シ、之ニ因リテ推測スルニ外ナラズ。推測ヲ以テハ、トテモ神造物主ノ情性、天人密接ノ関係ヲ知ルコト能ハズ。

範圍天地之化云云。故神无方而易无体。〔繫辞上傳〕

是ノ神ノ字、易ニ対シテ言フ。亦是レ至神ノ妙用ナリ。真ニ神ト名ヅクルニアラズ。

陰陽不測之謂神。〔繫辞上傳〕

是モ亦神妙ノ功用ヲ謂フ。直ニ鬼神ノ実体ヲ指スニアラズ。〈「再」〉

24 竹内 693 頁。

上記の『周易』からの引用はすべて宇宙を構成する「気」の神秘的な運動について述べたものであり、宋学においてはその運動にあらわれる法則（上文に「神道」といわれているもの）こそが至高の宇宙秩序「理」とされたのであった。

だが中井は、至高の存在が意思智能をもたない「理」であるという考え方を否定する。

僕等ノ所謂神ハ、意思智能ヲ具有スル者ナルガ故ニ、敢テ之ヲ理ト言ハズ。サレバ經書中ノ天ニ對シテハ、其歸スル所ヲ同ジクスルヲ知ルト雖、「理」ノ一字ヲ下スニ於テハ全然相違スルヲ見ル。理ニハ意思智能ナケレバナリ。〈「再」〉

中井にとって、キリスト教の神は明確に意思・人格をもつ存在であり、その意思のあらわれとしての自然の運動法則と神そのものとは、密接な関連をもちながらも、厳然と区別すべきものであった。資料3に掲げた創世記（1:2）の訳文を比較すると、「the Spirit of God」は他派では「神の靈」「天主の靈」と訳されているが、正教会訳では翻訳の原則に従い「神の神^{しん}」である。「神^{しん}」が当てられている $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ (spirit) は、もともと神の息・風を意味していた²⁵。旧約聖書において $\pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha$ は神の積極的な活力を表し²⁶、万物や諸現象に表れる神のはたらきをも指すといえる。漢語「神」は「礼拝の対象となる神聖な存在」という意味と、「万物においてはたらく神秘的な宇宙秩序」という意味を合わせもつ。正教会訳は漢語「神」の意味の重層性を生かし、「万物における神のはたらき」という spirit の含意を「神^{しん}」と同じ漢字を用いて表現し、なおかつ「神^{しん}」と記号・読みを付けることによって「神^{しん}」そのものと区別し表現しているといえよう。儒教経書の「神」の用例をよく知る明治期の知識人にとって、spirit を「靈」や「心」よりも「神^{しん}」と訳したほうが、God と spirit の関係性についてただちに了解が得られたであろうと考えられるのである。

③ 人間に内在し超越的次元とつながる本性

以上のように漢語「神」は「万物にあらわれる超越的存在のはたらき」をも意味し、それは当然ながら人間においてもはたらく。しかしながら人間においては、「神」は神と人をつなぐより深い役割を担う。

天職既立、天功既成、形具而神生、好惡喜怒哀樂臧焉、夫是之謂天情。〔天の役割が確立し、天のはたらきが成立すると、肉体が備わって神が生じ、好惡喜怒哀樂の感情が内蔵される。これを天情という。〕²⁷ 〈『荀子』天論〉

²⁵ 秦 21 頁。

²⁶ キドナー 58 頁。

²⁷ 藤井 477-479 頁。

上文のように、中国思想においては古来、超越者たる天のはたらきによって人体が生み出されるとされてきた。人体のなかでも、物質としての肉体「形」に対し、生命力や精神といった要素は「神」という語で表現される。このような「神」の用法は宋学においてもみられる。

高誘淮南子注曰、魂者、陽之神、魄者、陰之神。所謂神者、以其主乎形氣也。〔高誘の『淮南子注』に「魂は陽の神、魄は陰の神」とあるが、ここにいう「神」とは、それが肉体や肉体を構成する気を司っていることからいっているのだ。²⁸⁾ 〕〈『朱子語類』巻3 鬼神〉

ここで朱子は人間の「魂魄」を「神」と呼んでいるのだが、要するに人間に内在する「神」は、人間の肉体および生命活動を司るものとされているのである。しかしそれだけではない。

鬼神以主宰言、然以物言不得。又不是如今泥塑底神之類、只是氣。且如祭祀、只是你聚精神以感之。〔鬼神は主宰するものという観点から言ったものであるが、物体として語ることとはできない。また、今の泥でできた神像のたぐいのことではなく、ただの気である。たとえば祭祀は、なんじが精神を集中してこの気に感應するのだ。²⁹⁾ 〕〈『朱子語類』巻3 鬼神〉

朱子は「鬼神」を基本的に気の運動法則とみなし、意思・人格をもつ存在とはみなさない³⁰⁾が、いずれにせよ、「鬼神」は人智を超えた超越的な次元に属するものである。それに対し、「精神」は超越的次元にあるものを感じとる人間内部の機能を指す。すなわち「神」は、人間と宇宙秩序・超越者双方にまたがる意味をもつ。人間についていえば、「神」は、宇宙秩序・超越者となつがりそのはたらきを身体に顕現させる、生まれながらに付与された本性という意味を担ってきたのである。このような「人間に内在する本性」は、道家が同じく「神」といい³¹⁾、仏教徒が「仏性」「本来の面目」³²⁾などというように、儒仏道を問わず

²⁸⁾ 垣内・恩田 278-281 頁。

²⁹⁾ 垣内・恩田 347 頁。

³⁰⁾ 吾妻 220-224 頁。

³¹⁾ 「方今之時、臣以神遇而不以目視、官知止而神欲行。〔成玄英疏〕率精神以会理、豈偃目以看之。」〈『莊子』養生主〉。庖丁という達人が牛を見事に解体するとき、視覚などの日常的感覚を停止させ、生来具わっている「神」を宇宙秩序「理」に沿ってはたらかせていることを解いた箇所。

³²⁾ 「仏性」とは、すべての者に具わる仏になる可能性。「本来の面目」は主に禅宗において用いられる語で、悟った境地に現れる、天然のままで少しも人為を加えていない、人がもとから具えている本性をいう。多屋ほか編参照。

国思想においては重視されるものであった。漢語「神」に「人間に内在し超越的次元とつながる本性」という意味があることは基礎的な知識であり、中井はそれを当然知っていたとみてよい。

先にみた創世記（1:2）の「the Spirit of God」について、明治期に邦訳された正教会の聖書注解書は次のようにいう。

神ノ靈³³トイヘルヲ以テ偏ニ神ノ生活³⁴ヲ施スノカナリトスルハ不充分ナリ。聖三者ノ三位ナリト識ルヘシ。生命ノ泉ハ神ナリ。神ノ靈ハ自来無生ナル此ノ渾沌ノ質量ヲ温メテ之ニ生活ヲ施ス。顕現センカタメニ唯神ノ声ヲ待ツノ力ハ此質量ノ中ニ生ス。
〈『創世記精義』（句点は筆者による）〉

これによれば、「the Spirit of God」とは生命体に内在し神の声に呼応して顕現する力（はたらき）ということになる。「人間に内在し超越的次元とつながる本性」という意味での漢語「神」と似た意味を含むことがわかる。

中井は漢語「神」の様々な用法と、spirit との意味の重なりおよびずれについて認識していたであろう。そのうえで、キリスト教以外の宗教について次のように批判している。

或ハ斯ノ最上有権者ヲ以テ物質的世界ヨリ分離シテ、自己ヲ認識スル者ニアラズシテ、意識ナキ世界ノ本質ヲ為ス者ナリトスル者アリ。或ハ物質的世界ヨリ全ク分離シテ独立セルモノニアラズト雖、自己ニ存在ヲ有スル絶対ノ本質ナリト思惟スルモノアリ。其ノ帰スル所ヲ同ジクスルガ如シト雖、其内容ニ於テハ、彼此其趣ヲ異ニシ、殊ニ基督教ト比較シテ大差アルヲ見ル。〈「再」〉

ここで、至高の存在を物質世界から分離した「意識ナキ世界ノ本質ヲ為ス者」とみなすとして批判されているのは宋学、物質世界から分離してはいないが「自己ニ存在ヲ有スル絶対ノ本質」とみなすとして批判されているのは道家思想や仏教を指すとみてよいであろう。中井は、「人間に内在する本性」を自覚するのはよいが、その本性とつながる超越的存在（主宰者）が意思をもたない宇宙法則「理」であるとする宋学は誤りであるし、自己の本性それ自体が宇宙の絶対の本質であり充足しているとする道家思想や仏教も誤りであるとみなすのである。

ヨハネ福音書（3:6）の「神^oより生まれし者は神^oなり」について、正教会注解書は次のようにいう。

³³ 『創世記精義』は正教会訳新約聖書の出版に先立つ 1884 年の刊行であり、いまだ spirit を「靈」と表記している。

³⁴ ここでの「生活」とは生命力というような意味である。

後語靈³⁵也ニ於テハ行事ノ原ヲ指スニアラズ。聖靈ノ力及ヒ功用ニ由テ生スル更生ノ本質ヲ指スナリ。聖靈ハ人ノ罪ナル汚穢ヲ清メ、罪ノ為ニ敗壞セル神ノ象及ヒ肖ヲ修復シ、之ニ靈ナル至徳ノ且聖ナル者ト為ルノ力ヲ与ヘ以テ聖ニス。〈『約翰福音書注解』〉

これによれば、聖なるものへと更生しうる本質が人間には与えられており、それが「神[°]」にあたる。しかしこの更生には意思をもつ神のはたらきかけが必要であるため、中井は宋学や仏教を否定するのであった。

中井は「神ニ事フル道」を行うためには、「単ニ敬ミテ天ヲ恭フバカリ」ではなく、「如何ニセバ天ノ旨ヲ行フヲ得ベキカ」を知る必要があると考えていた（本稿 41 頁の引用文）。神の意思を聖書によって知り、神のはたらきかけを本性において自覚し、自身の行為につなげていくことが、中井の信仰において重要であったといえる。

中井は、儒教における漢語「神」は人智を超えた意思をもつ超越者を本来指すと考えていた。なおかつ、漢語「神」は超越者に呼応する人間内部の本性を表現するにもふさわしい言葉であった。ゆえに、中井にとって God を「神」、spirit を「神[°]」と訳すことは決して不自然ではなかったと考えられるのである。

結論

中井は儒教への肯定的評価を生涯変えることはなかったが、儒教とキリスト教は一致すると考えていたわけではなく、儒教はキリスト教の天啓によって補完されるべきものとしていた。

中井は儒教の「天（上帝）」とキリスト教の神を同一視していたにもかかわらず、日本正教会訳は God の訳語として「神^{かみ}」を用いている。そこには既存の漢訳・和訳聖書の影響のほかに、「天（上帝）」への儒教的尊崇「敬^{しん}」が、神の愛とそれへの人間の応答という神人関係を欠いているとの中井の評価が反映されているのではないだろうか。

また、正教会訳において、spirit にあたる「神[°]」という造語は他の和訳聖書にみられない特異なものであるが、これには中井の漢籍およびその中にみられる漢語「神」についての知識も影響を与えたのではないかと推測される。漢語「神」は、礼拝の対象となる神聖な存在を指すほか、目に見えない超越的存在のはたらきの森羅万象へのあらわれをも意味し、また、人間に内在し超越的次元とつながる本性という意味ももっていた。「神」という語の漢籍における多面的な意味を知悉していた中井は、それを生かして「神^{かみ}」およびその万物や人間における顕現としての「神^{しん}」という訳語の選定に関わっていったと考えられるのである。

³⁵ 『約翰福音書注解』もまた 1884 年刊行であるため、spirit を「靈」と表記している。

参考文献

〔一次文献〕

- 『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』大阪大学附属図書館 懷徳堂文庫内新田文庫
中井天生（木菟麻呂）「孔教とハリストス正教との接触」『ぱんだね』2-3、1922.12.
日本正教会『三歌斎経』日本正教会、1911
日本正教会『我主イイススハリストスノ新約』日本正教会、1901
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/825723/1> 2016年3月17日参照
堀江復訳『創世記精義』日本正教会、1884

〔二次文献〕

- 吾妻重二『朱子学の新研究：近世士大夫の思想史的地平』創文社、2004
牛丸康夫『パウエル中井木菟麻呂小伝』大阪ハリストス教会、1979
海老澤有道『日本の聖書：聖書和訳の歴史』講談社学術文庫、1989
垣内景子・恩田裕正編『『朱子語類』訳注 卷一～三』汲古書院、2007
金谷治訳注『論語』改訳版、岩波文庫、1999
キドナー、デレク著、遠藤嘉信ほか訳『ティンデル聖書注解 創世記』いのちのことば社、
2008
木村彰一『古代教会スラブ語入門』白水社、1985
京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター編『漢籍はおもしろい』研文出版、
2008
桐藤薫『天主教の原像：明末清初期中国天主教研究』かんよう出版、2014
黒川知文『日本史におけるキリスト教宣教：宣教活動と人物を中心に』教文館、2014
ゴヴォルノヴァ、アリョーナ「「明治日本における正教会聖書翻訳について：「靈性」の異文化
的解釈をめぐる」『Slaviana』19、2004
佐野大介「『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（一～三）」『懷徳堂研究』3
～5、2012～2014
佐野大介「中井木菟麻呂における儒教とキリスト教との関係」『懷徳堂研究』3、2012
金香花「キリスト教の神の日本語訳「神」：「用語問題」との関連で」『キリスト教学研究室紀
要』3、2015
鈴木範久『聖書の日本語』岩波書店、2006
ダヴィッド水口優明「聖ニコライの翻訳にかけた情熱：中井木菟麿の日記より」西日本主教区編
『亜使徒聖ニコライの翻訳事業』日本ハリストス正教会教団、2011
竹内照夫『新釈漢文大系 28 札記 中』明治書院、1977
多屋頼俊・横超慧日・舟橋一哉編『新版 仏教学辞典』法蔵館、1995

ドミートリエフ、ニコライ「聖書の翻訳：正教会日本語訳 聖ニコライ・中井訳について」

2010 http://orthodox-hakodate.jp/wp/wp-content/uploads/2010/09/002_20101021_2.pdf

2016年3月17日参照

長澤志穂「明治期聖書和訳にみられる漢学の影響：日本正教会訳を中心として」『南山宗教文化研究所 研究所報』24、2014

秦剛平『七十人訳ギリシア語聖書 I 創世記』河出書房新社、2002

フォン・ラート、ゲルハルト著、山我哲雄訳『ATD 旧約聖書注解 1 創世記』ATD・NTD 聖書註解刊行会、1993

藤井専英『新釈漢文大系 6 荀子 下』明治書院、1969

ポズニエーフ、ドミートリー・マトヴェーヴィチ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』講談社、1986

ポタポフ、アレクセイ「正教会の聖書・祈祷書翻訳：亜使徒聖ニコライと中井木菟麿の共同事業」『懷徳堂研究』2、2011

湯浅邦弘・武田健二編『懷徳堂の歴史を読む』大阪大学出版会、2005

Eber, Irene, *The Jewish Bishop and the Chinese Bible*, Brill, 1999.

【資料1】 中井によるメモ（大阪大学所蔵新田文庫内「中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類」の一部）の翻刻

※〔 〕は長澤による補足

正は正教会訳、米は漢文米訳³⁶、英は漢文英訳³⁷、施は上海主教美〔米〕国施約瑟（セレセフスキー）³⁸訳、新は新教訳³⁹

πνεῦμα [spirit]

	正	米	英	施	新
マトフェイ 〔マタイ〕(5:3)	神 ^o	心	心	心	心
ルカ(1:17)	精神 ^o	情性 ⁴⁰	性情	心志 ⁴¹	靈 ⁴²

³⁶『新約全書』（E.C.Bridgeman, M.S.Culbertson、1861）系統の聖書を指すと思われるが、引用箇所の記事が一部異なる。

³⁷『新約全書』（W.H.Medhurst, J. Stronach、1857）系統の聖書を指すと思われる。

³⁸ Samuel I. J. Schereschewsky (1831–1906)はリトアニア出身、アメリカに移住後、聖公会宣教師となり、中国で宣教、聖書漢訳に携わった後、1897年から1906年に没するまで東京に在住していた。Eber158-163頁を参照。

³⁹『新約全書』（米国聖書会社、1880）、いわゆる明治元訳を指すと思われるが、引用箇所の記事が一部異なる。

⁴⁰ Bridgeman, Culbertson 漢訳では「性情」となっている。

ルカ(10:21)	神 [°]	心	心	心	聖霊 ⁴³
ルカ(23:46)	神 [°]	霊	神	霊	霊
イオアン 〔ヨハネ〕(3:6)	神 [°]	霊	神	神	霊

Πνεῦμα τὸ ἅγιον [the Holy Spirit]

	正	米	英	施	新
マルコ(13:11)	聖神 [°]	聖霊	聖神	聖神	聖霊

ψυχή [soul]

	正	米	英	施	新
マルコ(12:30)	霊	性	性	性	精神
マルコ(14:34)	霊	心	心	心	心

καρδία [heart]

	正	米	英	施	新
マトフェイ(5:8)	心	心	心	心	⁴⁴
マルコ(12:30)	心	心	心	心	心
ルカ(1:17)	心	心	○	心	心

【資料 2】 資料 1 の引用箇所 の 対 照 表

πνεῦμα [spirit]

	マタイ(5:3)	ルカ (1:17)	ルカ (10:21)	ルカ (23:46)	ヨハネ (3:6)
我主イイススハリストスノ 新約(日本正教会、1901)	神 [°] の貧しき者 は 福 なり、天 国は彼等の有な ればなり。	彼はイリヤ の精神 [°] と 能力とを以 て主の前に 行かん、	そのとき 当時イイス ス神 [°] を以 て喜びて曰 へり、	父よ、我が 神 [°] を 爾 の手に託 す。	肉より生れ し者は肉な り、神 [°] よ り生れし者 は神 [°] な り。
新約全書 (Bridgeman,	虚心者福矣、以	彼将先於主	当時、耶蘇	父歟、我以	由肉而生

⁴¹ Schereschewsky 漢訳では「神志」となっている。

⁴² 明治元訳では「心」となっている。

⁴³ 明治元訳では「心」となっている。

⁴⁴ 空欄になっているが、明治元訳では「心」となっている。

Culbertson、1863) ⁴⁵	天国乃其国也。	而行、以以利亜 <u>性情</u> 才能、	<u>心</u> 喜曰、	我 <u>靈</u> 託爾矣。	者、肉也。由 <u>靈</u> 而生者、 <u>靈</u> 也。
新約全書 (Medhurst, Stronach、1857) ⁴⁶	虚心的人是有有福氣的、因為天国就是他們的国。	約翰將做上主的前鋒、用以利亜的 <u>性情</u> 才幹、	當時耶蘇 <u>心</u> 裡快樂道、	父阿、我將我的 <u>神</u> 交給你。	從身體生的、就是身體。從 <u>靈</u> <u>神</u> 生的、就是 <u>靈</u> <u>神</u> 。
新約全書 (Schereschewsky、1898) ⁴⁷	虚心者福矣、天国乃其国也。	彼將以以利亜之 <u>神</u> 志才能、為主前驅、	當時、耶蘇 <u>心</u> 喜曰、	父乎、我以我 <u>靈</u> 託爾手。	由肉軀生者肉軀也、由 <u>神</u> 生者、 <u>神</u> 也。
新約全書 (米国聖書会社、1881) ⁴⁸	<u>心</u> の貧き者は福なり天国は即ち其人の有なれば也	彼エリヤの <u>心</u> と才能を以て主の先に <u>行</u> ん	このとき此時イエス <u>心</u> に喜びて曰けるは	父よ我 <u>靈</u> を爾の手に託く	肉に由て生るる者は肉なり <u>靈</u> に由て生るる者は <u>靈</u> なり
聖書 (新共同訳、1995)	<u>心</u> の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。	彼はエリヤの <u>靈</u> と力で主に先立って行き、	そのとき、イエスは <u>聖</u> <u>靈</u> によって喜びにあふれて言われた。	父よ、わたしの <u>靈</u> を御手にゆだねます。	肉から生まれたものは肉である。 <u>靈</u> から生まれたものは <u>靈</u> である。
聖經 (和合本、1919)	虚心的人有福了、因為天国是他們的。	他必有以利亜的 <u>心</u> 志能力、行在主的前面、	正当那時、耶蘇被 <u>聖</u> <u>靈</u> 感動就歡樂、說、	父阿、我將我的 <u>靈</u> 魂交在你手裡。	從肉身生的、就是肉身、從 <u>靈</u> 生的、就是 <u>靈</u> 。
King James Version (1611)	Blessed are the poor in <u>spirit</u> : for theirs is the kingdom of heaven.	And he shall go before him in the <u>spirit</u> and	In that hour Jesus rejoiced in <u>spirit</u> , and said,	Father, into thy hands I commend my <u>spirit</u> .	That which is born of the flesh; and that which is

⁴⁵ <http://bible.fhl.net/ob/index.html>

⁴⁶ <http://bible.fhl.net/ob/index.html>

⁴⁷ <http://bible.fhl.net/ob/index.html>

⁴⁸ <http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/992682>

		power of Elias,			born of the <u>Spirit</u> is <u>spirit</u> .
New International Version (1984)	Blessed are the poor in <u>spirit</u> , for theirs is the kingdom of heaven.	And he will go on before the Lord, in the <u>spirit</u> and power of Elijah,	At that time Jesus, full of joy through <u>the</u> <u>Holy Spirit</u> , said,	Father, into your hands I commit my <u>spirit</u> .	Flesh gives birth to flesh, but the <u>Spirit</u> gives birth to <u>spirit</u> .

Πνεῦμα τὸ ἅγιον [the Holy Spirit]

	マルコ(13:11)
我主イイススハリストスノ新約 (日本正教会、1901)	^{けだしなんぢら} 蓋 爾等言はんとするに非ず、 ^{すなはちせいしん} 乃 <u>聖神</u> なり。
新約全書 (Bridgeman, Culbertson, 1863)	蓋非爾自言、乃 <u>聖靈</u> 也。
新約全書 (Medhurst, Stronach, 1857)	就可以講、不是你們自己講的、是 <u>聖靈</u> 講的呵。
新約全書 (Schereschewsky, 1898)	就可以講、不是你們自己講的、是 <u>聖神</u> 講的。
新約全書 (米国聖書会社、 1881)	^{そは} 蓋ものいふ者は ^{なんぢら} 爾曹に非ず <u>聖靈</u> なり
聖書 (新共同訳、1995)	実は、話すのはあなたがたではなく、 <u>聖靈</u> なのだ。
聖經 (和合本、1919)	因為說話的不是你們、乃是 <u>聖靈</u> 。
King James Version (1611)	for it is not ye that speak, but <u>the Holy Ghost</u> .
New International Version (1984)	for it is not you speaking, but <u>the Holy Spirit</u> .

ψυχή [soul]

	マルコ(12:30)	マルコ(14:34)
我主イイススハリストスノ 新約(日本正教会、1901)	^{なんぢ} 又、爾 ^{つく} 心を尽し、 ^{たましひ} <u>霊</u> を尽し、 ^{おもひ} 意 を尽し、力を尽して、主爾の神を愛せ よ、此れ第一の ^{いましめ} 誠なり。	又彼等に謂ふ、我が ^{たましひ} <u>霊</u> 憂ひて死 に近づけり、
新約全書 (Bridgeman, Culbertson, 1863)	爾当尽心、尽性、尽意、尽力、愛主、 即爾之神、此首誠也。	謂之曰、我心甚憂、瀕死矣。

新約全書 (Medhurst, Stronach, 1857)	你們應該尽心、 <u>尽性</u> 、尽意、尽力的、敬愛上主你的上帝、這就是頭一條誠了。	我的 <u>心</u> 裡實在不舒服、差不多要死了、
新約全書 (Schereschewsky, 1898)	你們應該尽心 <u>尽性</u> 尽意尽力的敬愛上主你的上帝、這就是頭一條誠了。	我的 <u>心</u> 裡實在不舒服、差不多要死了、
新約全書 (米国聖書会社、1881)	なんぢ心を尽し <u>精神</u> を尽し ^{こころばせ} 意 を尽し力を尽し主なる爾の神を愛すべし是 ^{これ} ^{いましめ} ^{かしら} 誠 の 首 なり	我 <u>心</u> いたくて ^{われ} ^{うれへ} ^{しめ} 憂 て死るばかりなり
聖書 (新共同訳、1995)	心を尽くし、 <u>精神</u> を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。	わたしは死ぬばかりに悲しい。
聖經 (和合本、1919)	你要尽心、 <u>尽性</u> 、尽意、尽力、愛主你的神。	我 <u>心</u> 裡甚是憂傷、幾乎要死。
King James Version (1611)	And thou shalt love the Lord thy God with all thy heart, and with all thy <u>soul</u> , and with all thy mind, and with all thy strength: this is the first commandment.	My <u>soul</u> is exceeding sorrowful unto death:
New International Version (1984)	Love the Lord your God with all your heart and with all your <u>soul</u> and with all your mind and with all your strength.	My <u>soul</u> is overwhelmed with sorrow to the point of death,

καρδία [heart]

	マタイ(5:8)	マルコ(12:30) ※ soul の項を参照	ルカ(1:17)
我主イイススハリストス ノ新約(日本正教会、1901)	<u>心</u> の清き者は ^{さいいはひ} 福 なり、彼等神を見んとすればなり。	心	父の <u>心</u> を子に、 ^{さか} 逆ふ者を義者の智慧に帰らしめて、備へられたる民を主 ^{ため} に進めん為なり。
新約全書 (Bridgeman, Culbertson, 1863)	清 <u>心</u> 者福矣、以其将見神也。	心	使父之 <u>心</u> 慈其子、逆者帰於義者之智、且主備作新之民。
新約全書 (Medhurst, Stronach, 1857)	<u>心</u> 裡清浄の人は有福气的、因為他們講来的看見	心	叫為父的人、愛惜自己的兒子、又叫忤逆的人、学

日本正教会訳聖書における「神」の漢語としての奥行き
——中井木菟麻呂の信仰と思想を手がかりに——

	上帝。		習公義、替主予備自新的百姓。
新約全書 (Schereschewsky、 1898)	心裡清淨的人是有福氣的、因為他們講來得看見上帝。	心	使為父者心慈其子、背逆者慕義人智慧、為主備歸誠之民、
新約全書（米国聖書会社、1881）	心の清き者は 福 なり 其人は神を見ることを得べければ也	心	是父の心に子を慈はせ 逆れる者を 義 人の 智 に帰らせ主の為に新なる民を備へんとなり
聖書（新共同訳、1995）	心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。	心	父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。
聖經（和合本、1919）	清心的人有福了。因為他們必得見神。	心	叫為父的心轉向兒女、叫悖逆的人轉從義人的智慧、又為主予備合用的百姓。
King James Version (1611)	Blessed are the pure in <u>heart</u> ; for they shall see God.	heart	to turn the <u>hearts</u> of the fathers to the children, and the disobedient to the wisdom of the just; to make ready a people prepared for the Lord.
New International Version (1984)	Blessed are the pure in <u>heart</u> , for they will see God.	heart	to turn the <u>hearts</u> of the fathers to their children and the disobedient to the wisdom of the righteous – to make ready a people prepared for the Lord.

【資料 3】 創世記(1:2)

日本正教会訳（『三歌斎経』、1911）	地は形なく虚しくして暗は淵の面に在り、神の ^{かみ しん} 神 ^{カミ} の ^{しん} 水 ^{カミ} の面に覆育せり。
旧約全書（大英国聖書会社、1883）『近代邦訳聖書集成』第9巻	地乃虚曠淵面晦冥神之 <u>霊</u> 覆育於水面。
旧約聖書創世記（北英国聖書会社、1884）『近代邦訳聖書集成』第4巻	地は ^{むなし} 曠空くして暗闇淵の面にあり神の <u>霊</u> 水の面を覆たりき
旧約全書（Schereschewsky、1898） ⁴⁹	地是空虚混沌、水面黒暗、天主的 <u>霊</u> 運行在水面上。
聖書（新共同訳、1995）	地は混沌であつて、闇が深淵の面にあり、神の <u>霊</u> が水の面を動いていた。
聖經（和合本、1919）	地是空虚混沌、淵面黒暗、神的 <u>霊</u> 運行在水面上。
King James Version (1611)	And the earth was without form, and void; and darkness was upon the face of the deep. And the <u>Spirit</u> of God moved upon the face of the waters.
New International Version (1984)	Now the earth was formless and empty, darkness was over the surface of the deep, and the <u>Spirit</u> of God was hovering over the waters.

（ながさわ・しほ 南山宗教文化研究所 非常勤研究員）

⁴⁹ <http://bible.fhl.net/ob/index.html>